
たとえゆっくりでも。

海田 陽介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

たとえゆつくりでも。

【Zコード】

Z7231C

【作者名】

海田 陽介

【あらすじ】

大学を卒業してからデザイン会社で働いている僕は久しぶりに友人の女の子のアパートを訪ねていく。そしてそこで思いつくままに話をしているうちに、ふと会話は将来のについての話になつて。

「かよちゃん家に来たのってめっちゃ久しぶりやんなあ」と、僕は言った。

「そうやねえ」と、かよちゃんは微笑んで頷いた。「確か二ヶ月くらい前ちやう？シゲちゃんが来たのって？」

「そんな前やつたけ？」と、僕は少し首を傾げながら、部屋のカレンダーに目をやった。

「…なんか大学を卒業してからはなかなかみんなに会われへんよな」と、かよちゃんは少し寂しそうな顔をして言った。

「そうやなあ」と、僕はカレンダーの日付にぼんやりと視線を注いだまま頷いた。

確かに大学を卒業してからはなかなかみんなに会うことはできなかつた。時間がなかつたり、時間があつたとしても、みんなの都合が合わなかつたりすることが多かつた。今日彼女のアパートに来ることになつたのも、街でばつたり彼女と顔を会わせたからだつた。

「そりいえばどう？一人暮らしはじめてみて？」

「と、かよちゃんはふと思いついたように明るい声で言った。

僕はその問いに微笑みながら、

「うん、なかなかいいもんやんで。やつと落ち着いてきたつて感じやな」「やな」と、答えた。

僕は先月から念願だつた一人暮らしをはじめていた。まだまだ足りないものもあるし、時間があればいじりたい部分も多いのだけれど

ど、最近になつてよつやく部屋としての体裁をなしてきたという感じがあつた。

「頑張つていい部屋にしてな」と、かよちやんは微笑みながらからかうように言つた。

僕は曖昧に微笑んだだけで何も答えなかつた。

「そういうばな」と、かよちやんはふと素晴らしいことを思いついたように声を弾ませて言つた。僕が彼女の方に視線を向けると、「さつき、ちょっとドレッジヴァンガードでお香買つてきてな」と、彼女は楽しそうな口調で言いながら、手元に置いてあつた白いビニール袋を手に取つた。そして、そのなかに手をいれてなから細長い箱を取り出すと、その箱を僕に手渡して、「これ、めっちゃいい香りすんねん」と、得意そくに言つた。

手に取つてみると、確かに彼女の言つとおり、その箱からはとてもいい香りがした。東洋をイメージさせるような、神秘的な香り。箱には、浅黒い膚をした、彫りが深くて眉の太い男女が、宮廷のテラスのようなところでお互いに向かい合つて立つている絵が描かれてあつた。

もしかすると、ふたりは愛し合つてゐるのかもしね。僕は試しに原産国名が書いてないかどうかその箱をよく見てみたのだけれど、一本の線をくねくねとくねらせていつたような文字が書いてあるだけでよくわからなかつた。

それから、せっかくだし、お香を焚いてみようといふはなしになつて、木の板にお香を一本さして、それにライターで火をつけた。すると、部屋のなかに微かに甘さを含んだ優しい香りがふんわりと広がつていつた。

その香りの回りで空気がわずかに冷たさを帯びていくような感じがあつた。お香は周囲の熱を取り込んで、その変わりに香りを發しているような気がした。

僕はお香の匂いに意識を傾けながら、何となく大学生の頃の自分達の生活を思い返していた。その一度とは戻らないたくさんの時間のつらなりは、僕の意識のずっと奥の方で、淡く、やわらかな光を放つて見えた。

外の通りを車が走りすぎていいく音が聞こえてきて、その音が夜の気配と、少しの寂しさを部屋のなかに静かに運んできた。

「時間が経つのは早いよなあ」と、かよちゃんが僕のとなりでしみじみとした口調で言つた。「大学を卒業してからもう一年も経つんよなあ。なんか信じられへんわ」

彼女はそう言つたあと、小さく笑つた。それから、彼女はふと僕の方を振り返ると、

「しげちゃんは最近どう?仕事は順調?」「
と、こぐらか遠慮がちな声で尋ねてきた。

僕はその問いに苦笑しながら、「やつとちょっと慣れってきたっていう感じはあるんやけどなあ」と、答えた。

僕は大阪の大学を卒業してから、小さなデザイン事務所に就職して働いている。デザイン事務所というと聞こえはいいのだけれど、電話の取り次ぎや、経理といった仕事ばかりで、ほとんどといっていいほどデザインの仕事はやらせてもらえていないのが実情だった。

そのうえ休日出勤や、残業が多くて、最近は今の会社を辞めよう

かどうしようか悩むことが多かった。僕がそのことを話すと、彼女は、「そつかー」と、自分の問題のように深刻な表情を浮かべて頷いた。

それから、彼女は顔を俯けて何秒かの間黙つていたけれど、やがて、「…実はわたしもな、今のアルバイトを辞めようかなつて思つてんねん」と、ポツリと告げた。

僕は少し意外に思つて彼女の方を振り返つた。彼女とこの前話したとき、彼女は今の仕事がわりと気に入つていると話していたような気がしたからだ。

彼女は大学を卒業後、アロマテラピーの会社に就職して働いていたのだけれど、ちょっとした事情があつてその会社を辞め、今は花屋さんでアルバイトをしていた。

「でも、植物を扱う仕事がしたいって言つてなかつたけ?」と、僕は尋ねてみた。

すると、彼女は下を向いたまま、「やうなんやけどな」と、少し弱い声で頷いた。

「でも、わたし、今フリーター やしな、このままでいいんかなつて思つてしまふねん。このままアルバイトを続けとつても正社員になれるかどうかわからんしな…ちょっと真剣に将来のこと考えなあかんなつて」

「なるほどなあ」と、僕は頷いた。彼女が悩む気持ちもわからないではないような気がした。回りの人間がどんどん将来が決まつてい

くなかで、自分が決まつていないと焦りもあるのだらうな、と僕は思った。

「じゃ、今のアルバイトを辞めて、ちゃんと就職できるといひ探すん?」

と、僕は彼女の方を振り返つて尋ねてみた。

すると、彼女は僕の顔をちらつと見て、でも、すぐに逃げるようになり伏せると、

「…なんかよくわからへんねん」と、言つた。

そう言つた彼女の声は、少し哀しそうに響いた。

「もつとちゃんとせなあかんていのはわかってるんやけどな、でも、自分がどうしたいのかがよくわからへんねん」と、彼女は言つた。「単純に就職してしまえばそれでいいってことでもなくてな…なんやろ、上手く言えへん…」

僕はその彼女の言葉に、曖昧に頷くことしかできなかつた。彼女もどう自分の気持ちを伝えたらいいのかわからないのか、黙つていた。

気がつくと、お香は全て燃え尽きて灰になつてしまつていった。その香りだけが、彼女の想いそのもののように、部屋の空間のなか懶りなく漂つっていた。僕はその香りを探すように、顔を上げて、天井あたりの空間をぼんやりと眺めてみた。天井には星の形をしたステッカーがはりつけてあつた。電気を消すと、淡い光を放つステッカーだ。

「…今、考へてるのはな」と、少し経つてから彼女は口を開いた。

「一度実家に帰らうかなって思つてんねん。うちの家自営業やしな、その手伝いをしながら、ゆっくり何か自分にできる」と探してみるのもいいかなって思つてな」と、彼女は言った。

そう言つた彼女の言葉は、でも、彼女がちゃんと納得してその結論に辿り着いたといつよりは、自分自身の気持ちに対する取り敢えずのいいわけのように聞こえた。でも、それについては何も言わないうことにした。いいわけが必要なときだけあると思つた。

また外の通りを車が走りすぎていく音が聞こえてきた。

それからあとは、テレビを見るともなく眺めながら、だらだらと当たり障りのないことを話して時間を過ごした。大学時代の友達が今どうしているかだとか、あのときつきましたふたりが別れてしまつただとか、最近行ったカフュのこととかそんなことだつた。

そして、そんな話をしているうちにすぐに時間が経つて、そろそろ帰らなければならない時間になつた。これが大学生のときだつたら時間のことなんて気にせずによつくりしていられたのだろうけど、僕は明日は朝早くから仕事があつたし、彼女の方にしてみてもアルバイトがあつた。学生の頃とは明らかに違う時間の流れがそこには

あつた。

駅まで送つていいくと彼女が言いだして、僕たちは駅までの短い距離を一緒に歩くことになった。夜の闇は街の明かりに照られさて少し紫がかつた色合いをしていた。空気は少しひんやりとしていたけれど、でも、もう微かに夏の匂いが混ざりはじめていた。

僕は歩きながら、これから訪れる夏を想つた。そして僕は何とかく、昔好きだった女の子ことを思い出した。

結局は届かないままに終わつた想いが、心の表面に今更のように淡く広がつていつた。そしてその部分が、ほんの微かに痛んだ。

近道をしようという話になつて、僕たちは途中にある小さな公園に入つていつた。そこの公園を抜けていけば駅までの距離を短縮できる。

夜の公園に人影はなかつた。しんしと静まりかえつた公園の中に、木々の葉のふるえる音だけが時折思い出したように響いていた。水銀灯の白っぽいような光に照らし出された木々の葉は、まだ生まれたての、やわらかい緑色をしていた。

「…ここで昔、みんなで花火したよな」と、僕のとなりで彼女が懐かしそうに言つた。

僕は彼女の言葉に曖昧に微笑して頷いた。

そういえばそうだつた。いつだつたか、近くのコンビニで花火を買ってきて、ここでみんなで花火をしたことがあつた。夏の暑い日だつた。ひととおり花形の花火をやつたあとで、みんなで線香花火

をしているときの情景が、今見えていた視界に重なるようにふつつと浮かんできてすぐに消えた。一瞬、耳元で懐かしい声が聞こえた。 ような気がした。

「またみんなで花火したいいよな」と、彼女は微笑みながら言った。

「そうやなあ」と、僕は頷いた。

昨日降った雨のせいか、足下の地面はやわらかかった。空気にはまだ微かに雨の匂いが残つていた。水たまりがあつて、その水たまりに水銀灯の光が優しく溶けていた。耳元を少し冷たい風が吹きすぎていって、それは何故か哀しい歌声のように聞こえた。木々の葉のふるえる音がそのあとを追いかけるように続いた。

「… ちつとも話やけどな」と、僕は少し経つてから言った。

彼女は歩きながら僕の方を振り返った。その瞳は、微かに怯えて
いるようにも見えた。

僕は彼女を安心させるようにできるだけ優しい表情を作った。そして、

「……でも、いんちやん？」と僕は少し迷つてから言つた。

「…なんか社会には早よ決めないかんみたいな雰囲気があるけどな
でも、そんな焦つたってしやあないで。焦つて上手くいくんやつた
らいいけどな、それでかえつて自分を追いつめてしまうくらいやつ
たらな、これでいいんやつて開き直つてゆつくりやつた方がいいん
ちゃう。さつき言つたみたいにいつぺん実家に帰るのもありやと思
うし、そのままアルバイトを続けとつてもいいと思うで」と、僕は
言った。

「…とにかく、焦らんでもいいんぢやうって、それだけ

やう言つてしまつたあとで、僕は少し照れくさくなつて笑つた。すると、それにつらわれるようにして彼女も少し笑つた。

それから、彼女は何秒間か間隔をあけて、

「…ありがと」

と、静かな声で言つた。

「シゲちゃんのおかけでちょっと気持ちが楽になつた氣するわ」と、彼女はいくらか恥ずかしそうに、それでもいくらかは救われたように微笑みながら言つた。僕は何も言わずに曖昧に微笑んで頷いた。

公園内に、僕たちふたりの足音はいくらか頬りなく響いていた。闇のなかをふたりの足音は、絡まり合つたり、重なり合つたりしながら進んでいた。僕たちは暗がりのなかを、よくわからないながらも、取り敢えず前に向かって足を踏み出していっているという感じだつた。

そのまま歩き続けてどこへ辿り着けるのかはよくわからなかつた。あるいはどこへも辿り着けないのかもしれなかつた。それでも僕たちは取り敢えず前に向かって足を踏み出していくしかなかつた。それくらいのことしか僕たちにできることはなかつたし、それに、前へ向かつて進み続けることを止めなければ、きっとそこから新しく広がつていく何かもあるはずだと思った。とにかく、何かを信じて進むことだと思った。

僕は足下に落としていた視線を、前へ向けた。すると、闇のなかに、駅の明かりなのか、白っぽい光が微かに見えはじめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7231c/>

たとえゆっくりでも。

2010年10月15日17時04分発行